

第8回

書道監修・執筆 鍋島稲子

それは甲骨文から始まった ～書の歴史～

今回学ぶこと

漢字のはじまりはいつごろで、どんな文字だったのでしょうか？ どのような変遷をたどりながら今の漢字の姿になったのでしょうか？ 現存する最古の漢字といわれる甲骨文から、現在我々が漢字の標準体として使用している楷書に至るまでの書体の変遷をみてみましょう。

学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

甲骨文、^{きんぶん}金文、秦の始皇帝、^{しょうてん}小篆、^{てんしょ}篆書、^{れいしょ}隸書、
^{そうしょ}草書、^{ぎょうしょ}行書、楷書、正式書体、日常書体

最古の漢字は甲骨文

甲骨文とは「亀甲獣骨文」の略で、その名の通り亀の腹甲や獣の骨（主に牛の肩胛骨）に刻まれた文字です。これは殷時代後期（紀元前13世紀前後～紀元前11世紀中頃）に行われた占いの記録です。

殷王朝では、天候、農業、軍事や王の行動など、王家にかかわるさまざまな事柄を占う習慣がありました。甲骨の裏側に、^{さん}鑽や^{さく}鑿と呼ばれる小さな穴をほり、そこに熱を加えると、表面に亀裂が生じます。その亀裂の形状によって事の吉凶を占いました。甲骨には、占った内容とその結果が刻されているのです。

篆書が完成するまで ～金文から小篆～

甲骨文に次ぐ古い文字は、青銅器に鋳込まれた金文です。青銅器は殷時代より作られていましたが、西周時代（紀元前11～8世紀）にその製作が最も盛んになり、銘文も長文化します。この時期の銘文は、西周の王室あるいは上層貴族など、ごく限られた人たちによるもので、文字の統一性が比較的保たれており、端正かつ堂々とした書きぶりです。

周の権力が衰えると、多数の国が興る春秋戦国時代に入ります。この時代の文字は国や地方によ

今回の課題

甲骨文から小篆までの篆書の世界を学ぶ。また、楷書が完成するまでの書体の変遷をおさえる。

て異なり、種々の字形が存在します。

動乱期を経て、全国を統一した秦の始皇帝は、文字を統一し、正式な篆書体である小篆を制定しました。また度量衡も整備し、重さや容積に関して一定の単位ごとに基準器を作りました。「権」とは、重さをはかる分銅です。基準器には、どれも始皇帝の全国統一をたたえる四十字の詔勅（皇帝の文書）が小篆で記されています。

楷書が完成するまで

左右対称を保つ篆書は、文書の作成に時間がかかるため、実用性を追求し、簡略化した隷書が生まれました。草書や行書は、隷書の早書きとして出現しました。草書は前漢時代、行書は後漢時代の木簡や残紙類、陶瓶などにその萌芽をみることができます。

はじめは、くずし書きがおこなわれていましたが、次第に字画を省略した字形になり、つづき書きもみられるようになります。後漢時代には、正式書体として隷書が存在し、手紙などを書くための日常書体として草書や行書が用いられました。楷書は、三国時代ごろにその萌芽がみられますが、唐時代において完成期を迎えます。

達人からひとこと！

篆書・隷書・草書・行書・楷書の五書体は、それぞれが人々の叡智の結晶であり、文字の構造だけでなく、審美的な側面からも考え抜かれたものです。優美な書法をもって書かれた作品は、手習いにふさわしい古典として尊ばれ、代々受け継がれてきました。時代の荒波に淘汰されることなく継承されてきた古典には、普遍的な魅力が備わっています。だからこそ、何年にもわたって学び続ける価値があるのです。

漢字の面白さは、例えば 2000 年前の漢時代の文字が、我々にも読めるということにあります。これは世界的に見てもけうなことです。漢字は、奥深さだけでなく、親しみやすさをも併せ持っているのです。限りないひろがりを持った漢字の世界に興味を持ってくだされば幸いです。



達人
鍋島稲子